

「私の論文作法」

自分史を書くことの意味―「私の論文作法」に代えて

渡辺利夫（拓殖大学顧問）

経験と経験知

ある年齢になったら自分史を書いてみる。貴重なことだと私は考えます。

文章というのは不思議なものです。それまでの人生の過程で直面したさまざまな経験について、あれやこれや思いめぐらせてもその像はぼんやりしたものでしかないのですが、これを思い切って文章化してみますと、その文章の背後から連想が次々と浮かんで再現され、書き出す前には想像もできなかったようなストーリーができあがってきます。

私は大学や新聞社などの主催する作文・論文コンテストなどの審査員をいくつかつとめてきました。授賞式の挨拶などに引っ張りだされると、次のようなことを生徒や学生たちに毎度のように伝えています。

”君たちは、私などに比べればはるかに若い世代の人たちですが、それでもそれなりにいろんな経験を積んでこられました。家庭、学校生活、海外研修、地域社会活動、その他のさまざまな場で経験を積んできましたよね。しかし、そうした経験もこれを文章化しませんでした、それらはいつの間にやら人生の中のささやかな経験のひとつとしてほとんどは忘れ去られていきます。

経験は、これを文章化することによって、初めて「経験知」となり、これがひとつの確かなブロックとなります。別の経験を文章化してもうひとつの経験知のブロックができあがっていきます。いくつもの経験知のブロックを積みあげていくと、簡単には崩れない経験知の大きな塊になります。このブロックの塊の大きさが、人間が成長したことの証なのではないでしょうか。

さまざまな経験を、本当に自分自身の人生にとってかけがえのないものとするには、文章化がどうしても必要です。経験の文章化を継続すること、これを自分のクセのようにしてしまったらどうでしょう。人間として成長していくには、これがどうしても欠かすことはできないと私は考えます。

「人生量」と「感情量」

人間は喜怒哀楽、さまざまな感情を抱きながら生きています。時に踊りあがらんばかりの喜びに湧くこともありましょうが、逆に胸を塞がれて身動きもできないほどの絶望に陥ることもありましょう。情動といたらいいのでしょうか。人生がこうした感情、情動と無縁であるはずがありません。

普通の人であれば、今日は昨日のように、明日は今日のように、まあどちらかといえば平

穏な毎日を過ごしているものと思われれます。しかし、時に激しい情動に翻弄されることがあります。私にも経験があります。

遠い過去のものであっても、ひどく辛い経験であれば、これがある種の「心的外傷」（トラウマ）となって、長いこと人間を苦悩させることがあります。「心的外傷ストレス障害」（PTSD）という言葉聞いた方もおられることと思います。過去の手ひどい経験が「フラッシュバック」（外傷後ストレス障害）を引き起こして、物事に集中できなくなったり、眠れなくなったりして、感情のコントロールがうまくいかないといったことがあります

阪神・淡路大震災や東日本大震災などを経験した人々の中には、いまなおこの症状に悩まされている方が多くおられると聞いております。

それほど劇的な体験ではないまでも、人は「どうしてあんなことをしてしまったのか」とか「なぜそういうふうになってしまったのか」とか、小さなことでもぐずぐずと悩むものです。そして、そういう自分が嫌になる、受け入れられない、という気分させられることがよくあります。私もそうです。「否定的自我」といえば何やら面倒な表現ですが、そういうことです。「くよくよするな」だけでは到底すまない気分なのです。

これを癒す心理療法などもあるとは聞いておりますが、そしてその療法のことに私が詳しいわけではありませんけれども、過去の苦しく辛い体験については、思い切ってそのことを文章化してみてはどうでしょうか。心の中の「悶々」を心の中に閉じ込めておくと、これはなかなか克服することが難しい。

文章化とは自分を「客体化」することです。「悶々」の感情を文章化してしまえば、書いた人はもうこの「悶々」を外から眺めるもう一人の自分とすることができます。平静な心をもって「悶々」の事実を眺められるようになるのです。自分の心の中の悶々から解放されるようになるのです。「否定的自我」から「肯定的自我」へと変じていくことができる、私はそう考えています。「魂の救済」といったらいい過ぎでしょうか。辛い苦しい過去を書いている最中は、辛く苦しいこともありましよう。しかし、辛い苦しい経験をその経験のままに書いていくと、書き終える頃には自分の心が随分と軽くなっていることに気づくはず

五木寛之さんが、最近、どこかの雑誌に書いておられましたが、”辛い時には辛い唄を、悲しい時には悲しい唄を”というのです。辛く悲しい時に自分を励まそうと明るく楽しい歌を歌っても、元気にはなれません。辛い時に辛い唄を、悲しい時には悲しい唄を歌うことによって、私どもの心が癒される。そういう逆説が真実のように私にも思われるのです。演歌のほとんどが辛く切ない歌です。実は、あれが「人生の応援歌」なのではないかと私には思われます。多少の年配の方であればみんなが知っている昭和の代表的な演歌が、美空ひばりの「悲しい酒」です。歌詞はこうです。

ひとり酒場で飲む酒は
別れ涙の味がする

飲んで捨てたい面影が
飲めばグラスにまた浮かぶ

酒よころがあるならば
胸の悩みを消してくれ
酔えば悲しくなる酒を
飲んで泣くのも恋のため

ひとりぼっちが好きだよと
言った心の裏で泣く
好きで添えない人の世に
泣いて怨んで夜が深ける

作詞：石本美由紀

作曲：古賀政男

「人生量」という言葉はありませんが、私はあってもいいと思うのです。ひとりの人間が生涯を通じてどのくらいの量の人生を送ったのか。この量は、おそらくこの人間が一生の間どのくらいの量の感情を抱いたか。私は、この量が多い人ほど、その人の人生は豊かなものだと思うのです。

「人生量」が「感情量」によって測られるとすれば、それは文章化された「感情表現量」によってだと私は考えます。優れた小説の多くは、感情表現の語彙がみごとに構成されたものだといつていいようにさえ思われるのです。

ここまででいいかかったことは、一つには、文章化によって「経験」が初めて「経験知」となり、これが私たちを成長させていくための「ブロック」となるのだということでしたが、二つには、経験といっても具体的な経験的事実だけではなく、その経験の過程で私どもが抱いた感情や情動も、これを文章化しなければ、人生量がそれほど大きなものにはならないのではないか、という私の思いです。

自己と他者

自分について自分が文章を書くわけですが、文章化された自分は、実はもう自分そのものではありません。自分の顔は自分ではみえませんよね。鏡という自分ではない他者に写しだしてみなければ自分の顔はわかりません。鏡に映しだされた自分は、本当の自分ではありません。しかし、それをなくては自分がどんな顔をした人間かはわからないのです。

私どもは自分を鏡に映すことによって自分を確認していますよね。社会生活において自己を映す鏡とは、他者です。他者とはまったく関わりのない完全に孤独な自己を想像することは難しい。まったくの孤独状態の中にあつては、自分がどういう存在なのか、という自意

識さえ生まれてはこないのではないのでしょうか。

私たちは、他者が自分をどう認識し、評価し、対応してくれるのか、この他者の認識と評価と対応に応じて、自分とはこういう存在なのだと思われ、そして社会生活を送っているのです。私どもは、そういう社会生活の中で自己を形成しつづける存在なのだと思います。自己は自己のみを通じて直接的に確認されるのではありません。自己は他者の目の中に宿る自己を間接的に確認しながら形成されていくものです。

私どもは、母親の胎内で生成し、この世に生まれてきます。私どもが初めて出会う他者が母です。他者であるとはいえ、きわめて密度の濃い「共生的」関係が母子関係です。この母子の共生的関係から少し離れて存在するのが、父親です。母親とならぶもうひとつの共生的関係にある他者が父親です。そして、その周辺にこれも多分に共生的な関係にある兄妹・姉妹さらには祖父母がいるはずです。いうまでもなく、これが家族です。

この家族関係においては、自己と他者との関係は、それをみずからは選び取ることができない、そういう意味で運命的なものです。

私どもは、まずは家族という共生的な他者の目の中に映る自己を確かめながら人生を出発させます。人生における最初の他者が家族です。この他者に映る自己は、その後の私どもを待ち受ける、多分に緊張を要する人為的な人間関係に比べてはるかに深い愛に満ちたものであります。「受容的」なものだといっていいでしょう。

家族という他者の目に映る自己が受容的であることを確認し、そして私どもは「肯定的な自我」を形成していくはずですが。逆にいいますと、母子関係、父子関係、家族関係がスムーズにいかず、緊張をはらむものであったりすると、「否定的な自我」が形成され、その後の人生の過程で私どもはさまざまな心理的葛藤に悩まされることになりかねません。

幼児期、児童期を経て、少年・少女期、青年期に入っていくとともに、私どもは家族とは異なる他者との人間関係を取り結んで生きていかななくてはなりません。小学校、中学校、高校、大学へ進むとともに、血縁や出身地やその他のさまざまな属性において異なる人々との人間関係の中で生きていかざるを得ないのです。

高校や大学を卒業しているんな企業、団体などの組織の中で働くようになれば、そこで取り結ぶ人間関係は、一段と錯綜したものとなりましょう。そうした人間関係の中でも、私どもは他者の眼に自分がどう映っているかを確認しながら、人生の船を漕いでいかなければなりません。きわめて多様な他者の眼の中に投影される自己を確認しながら、自己の他者への対応を変化させ、自我を確かなものとして形成していかなければならないのです。

「自己を貫く」といえば、なんだか勇ましく、潔^いきよことのような響きがあります。しかし、これはとかく単なる自己満足であったり、他者との間に無用な摩擦をつくりだしたりして、結局は、その人の人生を不幸で悲惨なものに陥らせかねません。他者の眼に映る自分をつねに理性的に見据え、柔軟かつ自在に自己を変容させながら、人生をしなやかに送るよう努めること、これが真に自立した人間の行動なのだと私は考えます。

さて、自分史のことです。幼児期から児童期、少年・少女期、それから青年期、壮年期を

経て老年期にいたる自分史を語る。これはひとつの形式として誰でもすぐに頭に浮かべるにちがいありません。この順序にしたがってさまざまな経験や印象鮮やかな出来事、その中の自分の立ち位置、感情などを書き綴っていけば、必ずやストーリーができあがっていきます。そして、それを眺めながら自分を再確認し、次の人生へのスターティング・ブロックとすることができるのです。

血脈を自覚する

「血脈」などという用語は、いまではあまり使われなくなっているようですが、自分史を書いていきますと、おそらく多くの方々がこの観念を呼び覚まされるのではないかと想像されます。この呼び覚ましは、とても重要なことだと私は思うのです。

私は最近、自分の「出生」のことについて何か書き残しておきたいと考えていたのですが、そのためのある貴重な材料が手に入りました。これをもとに血脈のことについて書いてみようと思いついたのです。その一部をちょっと紹介させていただきたいと思います。月刊総合誌 **Hanada** からの依頼を受けて書いた「令和新時代」についてのエッセイの冒頭です（「万世一系が日本の歴史」2019年6月号）。

私が生まれ育ったのは山梨県の甲府市です。甲府は四方を峻険な山々に囲まれた山国の町です。甲府の我が生家、建てられてからもう五〇年ほど、すっかり老朽化してしまい、いまでは住む者が誰もいなくなりました。廃屋をそのままにしておくわけにはいかない。長兄から相談を受け、この家を解体することにしました。

解体する前に、古びてしまった家具を整理していたところ、二階の奥まったところにおかれている引き出しから一枚の写真がでてきました。立派な装丁で、撮影した写真館の名前も刻印されています。台紙の周辺はボロボロですが、写真自体ははっきりとみえます。（写真1 カラー印刷）

この写真に映る九人の血族のうち、一番の幼子が私どもの母親だと長兄から聞かされ、はっと我が胸を衝かれました。裏書を見ると、明治三七年一月、山梨県中巨摩郡にて撮影、とあります。中央の軍服姿の男性が、私の母方の祖父です。この祖父が、日露戦争に出征する日の朝、家族の全員を集めて撮った写真です。

祖父の胸には、いくつかの勲章が垂れています。墓誌で確認したところ、祖父は日露戦争の一〇年前の明治二七年の日清戦争にも出征し、その軍功により賜ったものがこの勲章だということがわかりました。祖父が履いているのは草鞋わらじです。出征後、この草鞋で満州の荒野を転戦したのでしょうか。



左側に立って幼児を抱えているのが、私の祖母です。その幼児が私の母です。祖父の両隣に映っている二人の女の子は、母の姉です。右側の二人の老人が祖父の両親、つまり私の曾祖母です。後列の二人の女性は、祖父の姉と妹です。日露戦争が勃発した時点で、私の母は出生しており、その母が長じて結婚し、五人の子供を生み、その一人が私です。この写真をみるたびに私は、私という存在が私という個人のものであるよりは、脈々と連なる血族の中を流れながらいま生きてあるのだ、という実感を深くします。

私の自分史

人生とは経験の積みあげです。経験の文章化は、自分を再確認し、その後の自己を形成していくために欠かすことのできない作業だと先にいいました。

自分史を書く絶好の機会が私にはありました。私は一九八八年から二〇〇〇年まで、東京工業大学で教員をしておりました。退職時には長年の習わしとして「最終講義」というのをやらされます。講義といっても私の授業を受講している学生はもとよりですが、そうでない学生でも教員でも職員でも外からのゲストでも、誰でも参加していいことになっています。まあ最終講義に名を借りた送別会のようなものです。

最終講義で何を話そうか、随分思いあぐねたことを思い出します。経済学者が経済学のことをしゃべってもさして興味をもってくれそうにない。そう予想して私は「センチメンタルジャーニー—私の中のアジア」と、ややくだけたタイトルのレクチャーにしました。通常はあまり語ることはない自分史を、最後の機会なのだから一回くらいはみんなの前で話すのも悪くはないか、といった気分でした。

その最終講義に PHP の雑誌 Voice の編集者の一人が聴講に来てくれていました。レクチャーが終わったところで彼は、”先生、今日の話、面白かったです。テープにとっておきましたので、それを原稿に起こしますから、朱入れしてうちの雑誌に掲載させてください”という。ゲラに結構な量の朱入れをしてできあがった論文を掲載してくれました。”最終講義が雑誌に掲載されることなんて初めてのことだと思いますよ”と後に Voice の編集長からいわれたことを思い起こしています。

この雑誌論文のタイトルは「私のなかのアジア」でした。これが当時の中央公論の編集長の平林孝さんのお目にとまり、ある日、パレスホテルの喫茶店に誘いだされ、”渡辺さん、この論文にさらにいろいろ書き込んで、一冊の自分史として出版しませんか”といわれました。東京工業大学の定年退職は当時は六〇歳。退職後は新たに設置される拓殖大学の国際開発学部の学部長となることが決まっています、相当に忙しく駆け回っている時期でもありました。

”お誘いは大変嬉しいのですが、目下はそんな次第でものすごく多忙です。それにまだ自分史を書くのははやすぎるような気がします”と答えたのですが、平林さんは、”渡辺さんは戦争体験もありますしね。安保闘争なんてもういまの若者は知らないですよ。六〇歳がまだ若いなんてことはありませんよ。お忙しいことはわかりましたので、二、三年はおまします”といわれ、”まあ、なんとかやってみます”ということになりました。

自分史というほどのものではありませんが、自分の人生の断片についてあれやこれや書き連ねたものを『私のなかのアジア』としてが出版してもらいました。出版年は平成一六年の一月でしたが、平林さんは、その直前に逝去されてしまいました。執筆を依頼されたご本人が、出版より先になくなってしまい、実に複雑な思いに駆り立てられたことを思い起こします。

経験と経験知は、書く人によって文字通り「千差万別」です。私は教員・研究組織にずっといたものですから、研究史というべきものが自分史の中心になりますけれども、これはやや特殊な分野ですから研究史それ自体については記しません。書きたいのは、自分がどういう時代と社会の中を生きてきたのかです。

自分史を書くという場合、出生に始まり現在にいたる年表のようなものをつくって、これにしたがい順序だてて書いていくという手続きについては先ほども申しあげました。少年時代、青年時代、壮年時代、現在と大きく三つ、四つの時期を区分して、その中で自分にとって重要であったと思われる経験、その後の人生に与えた経験の意味などを書いてみたらどうでしょうか。ひとつのストーリーを書いていくと、さっきもいいましたが、書く前には想像もできなかったようなことどもが連想されてきて、内容は書いていくうちに段々と濃いものになっていきます。

青春時代を象徴するものから書き始める

私の場合、青春時代の中で最も象徴的なできごとは「安保闘争」でした。私が大学二年の

時のことです。

山梨県の片田舎から上京して慶應義塾大学に入り、最初の二年間を横浜の日吉で過ごしたのですが、その時に安保闘争が燃え盛りました。「六〇年安保」といわれましたから、もう六〇年ほど前のことです。何も知らない田舎出の青年です。全国から集った若者たちが私には難しい政治用語を滑らかに使いながら、日本の政治状況や日米関係のことなどを論じる姿に少し酔いに似たような感覚を覚えて、少しずつその運動の熱気の中に、後にはすっかり冷めてしまいました。当時はのめり込んでいきました。

大学の授業にも出席せず、連日のように国会議事堂周辺をデモしていました。しかし、そんな事実ばかり書いていては、その時点で自分が何を考えて行動したのかを振り返っておく必要があります。そうしないと、自分が何を考えて成長してきたのかについての記録、つまり自分史にはなりにくい。

酔ったように若者の熱気に吸い込まれていったと書きました。しかし、酔っていたのは体の方だけで、頭の方は奇妙なほどに冷めていたことを思い出します。冷めていたのなら運動なんかに参加しなければよかったんじゃないか、と思う人がいるかもしれませんが、それは大衆運動の「衝動」というものを経験したことのない世代の人々の感覚だと思います。

熱気に体は酔っていたが、頭の方は妙に冷めていたのはなぜなのか。こういうことでした。どうしても安保闘争の論理の中心が不透明だと感じ始めていたのです。周りに同学や先輩たちが語っている論理はひょっとしてまちがいでないだろうかという感覚が、初めはぼんやりと、しかし次第にはっきりと私の頭の中に像を結んでいったのです。

安保闘争が終焉した頃は、逆に日米安保改定は不可欠だと考えるにいたりしました。その後は、日米同盟は日本の防衛の要であり、これを強固なものにしなければ日本の安全は保障されないという議論の持ち主となっていまにいたっています。私が安保闘争の中で何を考えたのかは、自分史の中での貴重な思考過程であったと思うのです。

自分史では、当時の自分の考えをそのまま再現しつつも、その後に得た知見を加えて現在の自分があるわけですから、自分史の中にその知見が入ってもかまわないし、むしろその方が自分史としては正当であるかのように思います。『私のなかのアジア』ではこう書きました。

安保闘争は不思議な政治運動だった。昭和二七年に発効した旧安保条約は敗戦国日本としては他に方途のない選択であった。しかし、屈辱的なまでに日本の主権を制約した不平等条約でもあった。米軍の駐留が恒常化され、日本国内の内乱や騒擾にも駐留米軍の出動が可能であり、基地を米国以外には貸与することはできず、さらには米軍の日本防衛義務と条約期限のいずれもが明文化されないという「片務性」をもってその特徴としていた。

新安保条約とは、片務性の「双務性」への改定である。事実、新条約の成立により、内乱時の米軍の出動条項と米軍のみへの基地貸与の二つの条項が削除され、また米軍の日本防衛義務ならびに条約期限一〇年以内が明文化された。

憲法第九条が存在し、しかも憲法改正が叶わぬ政治状況におかれていた当時、米軍の日本防衛義務に対応する日本による米国防衛義務を明文化することはまったく不可能であった。それゆえ新安保条約は、日米が相互に平等な地位と責任を分かち合う完全な双務性からはほど遠いが、少なくともそれに近づく第一歩であったことはまちがいない。

それでは新安保条約に反対する安保闘争とは何だったのか。ただの自立拒否だったのか。そんなこともあるまい。安保闘争とは何を守るための運動だったのか。守ろうとしたのが戦後民主主義だというのであれば、理論武装はいかにも軽い。多数の横暴による強行採決といったところで、普通選挙にもとづく議会制度とは元来が多数を競い合うものである。国会への警官導入も少々手荒ではあったが、議員が座り込みによって議長の登壇を阻止したのも暴力である。暴力が別の暴力を難じても正当性はない。

現実の背後にあるものを想像する

そのうえで、それでは安保闘争とは何であったかと問うて私はこう書いたのです。

安保闘争が隠しもっていたものはナショナリズムである。太平洋とアジアで敗走を繰り返し、原爆投下により無数の国民を殺傷されたものの、日本は本土決戦に敗北して国力のすべてを失ったわけではない。無条件降伏ではあったが、米軍に対する敵愾心や対抗の構えまでを摩滅されてしまったのではない。戦後復興は予想を超える速度で進み、昭和三〇年代の中頃には、未曾有の高度経済成長期を迎えた。政治的屈辱と経済的自信とがないまぜになって、この頃には戦後鳴りを潜めていた大衆的ナショナリズムが高揚し始めたのである。ならば、ナショナリズムが安保改定を潔しとせず、逆に反安保改訂へと傾斜していったのはなぜか。

ナショナリズムとは、他者に投影して自己を確認し、他者に対抗して自己を主張する民族心理である。自己を投影し対抗する他者が存在しなければ、そもそもナショナリズムは成立しない。

日本という自己にとっての他者とは米国であった。他者が強大であり、しかもこれがかつて自己を圧した存在であってみれば、自己の存在を訴える対象としては申し分ない。人間の成長過程を心的深層から捉える発達心理学の示唆する通りなのであろう。戦後日本のナショナリズムは、米国に自国をぶつけて存在を主張する、つまりは反米ナショナリズムたらざるを得なかったのである。

組織の中の人生

青春時代の自分史を書く場合、私にはどうしても書いておきたいもうひとつのできごとがあります。私は大学を出てから日本化薬株式会社という民間企業に就職しました。三年間、そこで働き、その後に母校の大学院にいて博士号を取得、母校ではない大学の専任講師として教員生活に入ったのです。

わずか三年間でしたが、私の人生に大きな影響力を与えてくれた経験でした。会社を辞める理由は、会社の仕事がいやになったからではまったくありません。”研究者としてなんとしてでも自立したい。その道に入るにはこの年齢くらいが限界かな”と思いを定めたのです。会社での勤務は、私にはむしろ大変、充実した時間でした。何よりその後の人生で経験することごとをみる時に、この時の経験ほど役に立ったものはないといってもいいほどです。

会社に入ったのは昭和三八年、翌年が東京オリンピック、「企業の時代」でした。

私が勤務したのは、東京赤羽の荒川沿いに立地する医薬品製造工場でした。資材倉庫課に配属され、工場敷地内の各所への資機材の搬出入の事務を執り、かたわらフォークリフトで化学薬品のドラム缶を主要部所に運び込むといったことも私の仕事でした。フォークリフトの運転免許や危険物取扱主任者のライセンスも当時取得しました。

私が何より驚かされたのは、企業組織における人間関係でした。上述の自分史の中ではこう書いたのです。

工場がコミュニティーを形成し、人々が相互に強く結びついて一つの小宇宙を形成している。この事実が私を驚かせた。この頃の私には左翼的なものの見方は失せていたが、それでも労働者は経営者と対立関係にあるものだと思い込んでいた。安保闘争の前年昭和三四年には、三井三池闘争という階級闘争を絵に描いたような労使紛争が起こり、これが労働運動の原型として私どもの頭の中に刷り込まれていた。

しかし、赤羽の工場で観察した人間関係は、家族主義的としかいいようのない暗黙の合意を前提にした、まことに協調的なものであった。工場長はいつも菜っ葉色の作業服を着て、ネクタイなどつけていなかった。彼は会社の取締役として経営者の一人でもあった。三〇〇人ほどの従業員に誰彼となく声をかけ、新入社員の私の名前もすぐに覚えてくれた。武田という苗字のその工場長は従業員からはタケちゃんと呼ばれ、飲み会にでもなれば、真っ赤な顔で畳に膝を擦りつけながら従業員に酌をしまわった。

終身雇用を疑う者はおらず、少しずつではあれ給料が上昇していくことを楽しみとしていた。労働組合は確かに存在した。組合の集会が月に一回くらい開かれ、私も毎回これに参加した。委員長が経営側との交渉の経過を説明し、次いで当時はやりの左翼用語でやや反体制的なことを演説した。これに組合員が和して拍手するのだが、緊迫感はまるでない。労働組合が「経営側」と何かを争うという雰囲気を感じたこともない。労働組合の方に、そもそも経営側などという認識があったかどうか。

新しく大学に職を得て妻子を養い、一人前になれたのかという感慨にふける間もなく、その大学で激烈な大学紛争が勃発、なんとこの大学は関東連合赤軍の本拠地だったのです。

大学に入りたての私の仕事はといえば、師の原覺天先生の講義ノートを作成すること、それに月に一回開かれる教授会の議論をノートするといったことくらい。これで満額の給料

をもらっていいものか、それまでの極貧の生活からすれば天国にいるようなありがたさでしたが、こんなこと長くつづくはずありません。

安保闘争は自分が勝手に参加したもので、その帰結がどうあれ、すべて自己責任です。しかし、今度の学園紛争では、私は若手とはいえ学生と対峙する教職員側の立場にいたわけです。若者集団とどう付き合ったらいいものか、自分史の中では重要な一ページになりました。

この論説のはじめのところに書いた私の言葉を、最後にもう一度、引用しておきます。

“君たちは、私などに比べればはるかに若い世代の人たちですが、それでもそれなりにいろんな経験を積んでこられました。家庭、学校生活、海外研修、地域社会活動、その他のさまざま場で経験を積んできましたよね。しかし、そうした経験もこれを文章化しませんが、それらはいつの間にやら人生の中のささやかな経験のひとつとしてほとんどは忘れ去られていきます。

経験は、これを文章化することによって、初めて「経験知」となり、これがひとつの確かなブロックとなります。別の経験を文章化してもうひとつの経験知のブロックができあがっていきます。いくつもの経験知のブロックを積みあげていくと、簡単には崩れない経験知の大きな塊になります。このブロックの塊の大きさが、人間が成長したことの証なのではないでしょうか。

さまざまな経験を、本当に自分自身の人生にとってかけがえのないものとするには、文章化がどうしても必要です。経験の文章化を継続すること、これを自分のクセのようにしてしまったらどうでしょう。人間として成長していくには、これがどうしても欠かすことはできないと私は考えます。”